

The front hospital

ザフロント ホスピタル

特定医療法人共和会

共和病院

愛知県大府市

精神疾患をもつ患者さんの 社会復帰を支える医療を展開

1958年に開設し、翌年法人化した特定医療法人共和会共和病院は、精神科を柱に内科系診療も行う。訪問看護や在宅介護事業なども次々と展開するほか、地域住民向けに心身の健康維持を促す勉強会なども開催。精神疾患をもつ患者さんの社会への復帰を支えるほか、地域住民の健康管理の役割も担っている。

「先義後利」の考えで病院経営を実践

共和病院は、内科医の加藤邦之助氏が、精神科病院の需要を見越し、68床で開院。その後、段階的に増床を繰り返し374床まで拡大した。精神科医療の質向上にも取り組み、87年、すべての病室から格子を撤去し、99年には「身体抑制ゼロを目指したガイドライン」を策定。全患者さん、特に高齢者に対し、自由と誇りと安らぎを提供することを基本に掲げ、身体抑制をゼロにするための努力を続けることを明文化した。

現会長の加藤仁氏が理事長に就任した96年以降は、「優しい医療・楽しい職場」を病院理念とし、患者さんの自立を目標に開かれた精神科医療の提供を目指す。精神科の患者さんは若年層が多いため、仕事を持ち経済的に自立し、地域の中で暮らせるようになることが目標だ。地域の受け皿づくりとともに、長期的な視野で支援できるスタッフの育成に力を注ぐ。

精神疾患をもつ患者さんを地域で支える取り組みにも注力し続ける。98年の「桜クリニック」「グループホームみどりの家」開設を皮切りに、訪問看護ステーションや通所リ

ハビリ、訪問介護、住宅型有料老人ホームなどを次々と開設し、2003年には、地域の医療機関や住民を対象に「地域医療フォーラム」をスタート。地域での拠点づくりに加え、患者さんを支える人たちの育成にも力を注ぐ。



「正しいことをすれば利益は後からついてくる」と話す山本直彦理事長。



「優しい医療・楽しい職場」を実践するスタッフ。

15年には山本直彦氏が理事長に就任。「優しい医療・楽しい職場」の理念を引き継いだ。

山本理事長は「『先義後利』『桃李成蹊』を大切にしています。『正しいことをすれば、利益は後でついてくる』『徳のある人の周りには人が集まる』という考え方です。経営効率のみを考えるのではなく、患者さんの人権を守り、働き甲斐のある職場をつくることで、地域に認められる病院になれると考えています」と語る。

患者さん、職員を守る取り組みを重視

精神科医療を取り巻く状況は、近年大きく変化している。精神科救急、急性期診療の充実が図られる一方、退院促進や地域移行も進む。「長期間の入院を受け入れる」という精神科病院の経営モデルや地域がもつイメージを変え、患者さんが地域での生活を継続できる仕組みづくりが求められる。

19年、創立60周年を迎えた同法人は、急性期医療の強化と地域移行の課題解決に向け、積極的な取り組みを開始した。3棟あった病棟のうち2棟を解体し、新棟を建築。病床の削減も行い、残る1棟と合わせて、精神科病棟186床（スーパー救急83床、一般60床、療養43床）、内科病棟80床（医療療養）の計266床に変更した。

建替えに際して、各部門から約20人が参加する建築



職員の思いを実現した新館の居室。

委員会を発足し、新病院建築に現場の意見を生かした。スーパー救急に入院する患者さんは自傷や暴力行為があるため、個室を設け、壁の材質にも工夫をこらした。当初、建築会社が提案した壁は堅いものだったため、職員で複数の壁材を吟味し、患者さんが傷つかないように軟らかい壁材を導入した。

また、複数ある隔離室のそばに休息室を配置。隔離が必要な時期を過ぎ、症状が落ち着いてきた患者さんが、日中気分を変えて過ごせる場所をつくった。隔離室から、いきなり一般病棟に移ると、本人も周囲の患者さんも不安を



外部講師を招き、ACPや発達障がいなどをテーマに開催する「地域医療フォーラム」。

感じる。休息室で過ごす時間を設け、様子を見ながら、時間を決めて数時間ずつ一般病棟への移行を進めていく。隔離室から一般病棟まで、病気の症状に合った居場所づくりを工夫した。

これらの事例は、職員が患者さんの状態をよく理解し、最善の支援をしたいという意欲を示したもので、日常のケアにも表れる。何十年にわたり入院していたある患者さんが、散歩に出ることで症状が安定することに気づいた職員が「もっと散歩に出してあげたい」と提案。職員が同行すると、病棟内は人員不足になる不安がある。しかし、他の職種との連携を図り、散歩の回数を増やしたのをきっかけに、患者さんの状態は改善。現在は、病院を出てグループホームでの生活が可能になった。患者さんにとっての散歩は、地域に帰るための第一歩。職員は、患者さんにとって良いと思われることに、常にチャレンジしている。

職員を守る取り組みも重視し、一般社団法人日本こころの安全とケア学会が開発した「CVPPP(包括的暴力防止プログラム)」に取り組む。インストラクター資格を取得した職員もあり、暴力は止めるものではなく、生まないものという考え方で、患者さんとのふだんからの関係の築きかたに配慮している。

患者さんの受け入れを目標に 地域の理解を進める

患者さんが地域で、継続して生活するには、住民の理解も欠かせない。今年24回目を迎える「地域医療フォーラム」は、発達障がいやACP(アドバンス・ケア・プランニング)



精神疾患をもつ人の地域での受け入れ法を考える「できることまちよりワークショップ」。



精神科病院のイメージを変えるラジオ番組「キラキラチアナイト」。

など、毎年テーマを変えて開催し、多くの住民が参加している。ケアマネジャーや介護施設の専門職などが参加し、事例をもとに支援の方法などを考える「研究発表会」も開催し、精神疾患に対する理解を深めている。

「できることまちよりワークショップ」も開始。地域の人たちに患者さんを受け入れてもらうため、心の準備を促す内容だ。行政や郵便局など公的な機関や地域の企業などに案内し、希望者を募る。参加者は5グループ程度に分かれ、提示された疾患や症状の患者さんを受け入れるために自分は何ができるか、グループワークをする。大府市のほか、隣接の名古屋市緑区などからも参加し、熱心なリピーターもいる。これらの取り組みを通じて地域住民は、患者さんを受け入れる気持ちりが向上しているという。

地域の施設訪問やラジオ放送を通じて、精神科病院のネガティブなイメージの転換にも取り組む。元看護部長で常務理事の松下直美さんは、パッチ・アダムスのように、クマの衣装で地域を訪問。病院と地域のかけ橋になっ



患者さんが地域で暮らし続けられるよう訪問看護も整備。

ている。ラジオ放送も松下さんが担当。地域で活動されている方や、もともと同院に通院されていた患者さんと呼んで話をするほか、クスッと笑えるような楽しい話題を提供する。精神疾患への理解を促すほか、精神科病院への敷居を下げる目的もある。

22年3月、病院につながる道路が拡張され、JR大府駅などつなぐ巡回バスも運行を開始。院内のバス停を利用するため、病院受診者以外も来院するようになり、「共和病院って、こんなにきれいだっただんだ」「内科もあるんですね」と、身近な病院として認識されるようになってきているという。

「大府市には公的な病院がないため、当院は精神科以外でも住民の健康管理を担ってきました。新病院はお祭りなどができるよう玄関前の駐車場を立体駐車場にせず、面積を広く取っています。新型コロナウイルス感染症のため、地域の人たちとの交流を控えていましたが、今後は進めていきたい」と語る。

山本理事長は「患者さんが地域に戻られる際、グループホームからアパートへ住み替えることもあり、他の地域では大家さんが嫌がるということも聞きます。けれども、この地域では、不動産屋さんがよく理解してくれており、『共和病院の患者さんは大丈夫』と大家さんに言ってくださいます。当院は駅から歩いて約20分と、アクセスは良くないため、建て替えの際は移転も考えました。けれども、地域との関係が良くて、ここに建てて良かったなと思います」とほほえむ。

「少子高齢化が進む中で、発達障がいなどをもつ方も貴重な人材の一人です。そういう方がどうやって自立されていくのか、それには行政の支援や国策も必要です。精神の福祉に取り組むのは容易ではありませんが、それをやってこそ本当の福祉だと考えています」と語る。



患者さん以外の地域住民も利用する巡回バスを開始。



児童の発達障がいやパーソナリティ障がいに力を入れる。

hospital data



特定医療法人共和会 共和病院

〒474-0071 愛知県大府市梶田町2-123
TEL0562-46-2222 <https://www.kyowa.or.jp>

- 診療科目:精神科、心療内科、神経内科、内科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、肛門外科、放射線科、リハビリテーション科、歯科
- 病床数:精神科救急85床、精神科一般58床、精神療養43床、医療療養80床